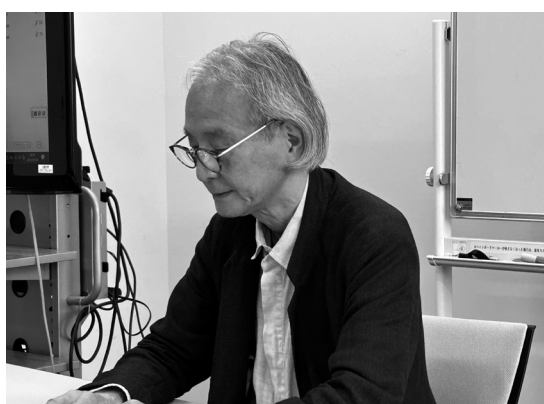




Social Designer

インタビュー

本研究科を誕生させた北山晴一先生を囲んで 研究科名に込めたメッセージ



きた やま せい いち
北山 晴一 先生

立教大学名誉教授、文化ファッション大学院大学客員教授、社会デザイン学会常任理事・前会長。東京大学文学部フランス文学科卒業後、同大学院文学研究科修士課程修了、同博士課程満期退学。クレルモンフェラン大学、パリ第3大学留学後、パリ第3大学専任講師。『衣服は肉体になにを与えたか』（1999年、朝日新聞社）、『世界の食文化』（2008）他、著書論文多数。



司会・聞き手／
おさ ゆ き え
長 有紀枝

立教大学21世紀社会デザイン研究科研究科委員長。社会学部教授。認定NPO法人難民を助ける会(AAR)会長。人間の安全保障学会(JAHSS)会長。長年NGOの活動を通じて、紛争地の緊急人道支援、地雷対策、地雷禁止条約策定交渉などに携わる。専門はジェノサイド予防、紛争下の文民の保護、人間の安全保障など。立教大学副総長。専門はジェノサイド研究、移行期正義、人間の安全保障、国際人道法など。

長 皆さまご存じのように、北山先生は、まず、21世紀社会デザイン研究科を立ち上げられる前に、1998年、文学部に（独研究科ならぬ）独立専攻としての比較文明学専攻を立ち上げられ、また、大学院改革の構想段階から21世紀社会デザイン研究科の企画段階まで、全てのルールを敷かれてこられました。それと同時に、社会デザイン学という概念もはじめて提唱されておられます。

来年度2024年度より、「21世紀社会デザイン研究科」は重要な名称変更を行います。具体的には、研究科名が「21世紀社会デザイン研究科(Graduate School of Social Design Studies)」から「社会デザイン研究科(Graduate School of Social Design Studies)」に、また専攻名が「比較組織ネットワーク学専攻(Business Administration in Network and Social Organization)」から「社会デザイン学専攻(Social Design Studies)」に、それぞれ変更になります。このような節目のときに、あらためて北山先生からこの研究科と専攻を立ち上げられたときの経緯や、研究科の企画や名称に含められたいろいろな思いや考え、それらを全部含めて、過去、現在、未来、お好きのように先生に話していただければと思います。

北山 よろしく願いいたします。ご存じかと思いますが、大学院21世紀社会デザイン研究科出発の時点から、これまで繰り返し投げかけられてきた質問があります。「社会デザインとは何か」という質問がそれです。この問いが含む持つ学問論的意味については、後で詳しく触れたいと思いますが、こうした質問に答える代わりに、私自身はいつも別の問いかけ、すなわち「何ゆえの社会デザイン(学)なのか」という問いかけを対置してきました。すると今度は、さ

らに多くの人々から、「なぜ社会デザイン学の教科書を作らなかったのか」とか、「今からでも作ったらどうか」という誘いを受けることになりました。しかし、私自身は、教科書をつくることについてはずっと否定的な立場を維持してきました。その理由は、簡単です。教科書をつくるためには、「社会デザインとは何か」という質問に対して、それこそ十分に学問論的、かつ戦略的な対応を用意しておく必要があると感じていたからです。

したがって、私のきょうのお話は、立教大学の大学院改革と21世紀社会デザイン研究科の設置に携わってきた人間として、当時の立教大学において、何ゆえこのような名称をもつ大学院の設置を望んだのか、設置前後の大学内部の雰囲気を出しながら、自分なりに考えていたことをお話ししたいと思います。

「文明社会の危機管理」というミッション

ご存じのように、21世紀社会デザイン研究科は、設置の趣旨として「文明社会の危機管理」という目的を掲げています。なぜ文明社会の危機管理なのかについては、1999年に出された「新大学院構想ワーキンググループ」（座長：丸山恵也・経済学部教授。いわゆる丸山委員会）の答申では、おおむね、次のように説明していました。いわく、20世紀の終わりが近づき、世界的な規模で進展する科学技術の発達と経済活動の活発化と広域化、それにとまなう社会構造の著しい変化や地球環境の危機など、当時の誰もが「これまでのようにはいかない」という危機をいだいていたにも関わらず、そうした問題意識や危機感を学問的に受け止め、かつ人材育成をも合わせて考える想像力が日本の大学には決定的に欠けていた、

として、「社会デザイン研究科」設置の構想を打ち出しました。

じっさいに研究科が設置されたのは、世紀の替わった2002年のことですが、すでに1999年の時点で、「社会デザイン」の用語（表現）が登場し、しかも、設置時には、立教大学に固有の、つまりは大学のもつミッション性にも訴える大学院研究科が設置されるに至ったわけです。設置後の履修要項では、そのことについて明確に宣言しています。すなわち、研究科の設置理念の核をなすものとして、「人権意識に裏付けられた真に共生的な社会を創成するにはいかなる理念と知識と技術とが必要であるか」という問いを投げかけています。この問いは、21世紀社会デザイン研究科の中心理念でもあります。立教大学そのものの建学の精神を具体化したものに他ならないとも明言することができます。

詳しく説明している余裕がないので強引にまとめてしましますが、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科の基本的方向性は、以下のようなものになるかと思います。

- ・ 文明社会の危機管理
- ・ 新時代の社会運営のための組織論研究
- ・ 新時代の社会的アクターとして重要性を増す非営利組織の経営理論
- ・ 社会人の再教育を重視する
- ・ 大学院の新しい運営形式としての独立研究科方式（学部と直結しない研究科）を採用する

ご覧のように、個々に挙げられた特色（とりわけ危機管理の学と非営利組織の経営論）は、いずれも、当時の感覚としてはとてつもなく突飛なものであり、しかも独立研究科構想の持つ採算性への懸念が強く、答申は出たものの、学内的にはむしろ否定的な雰囲気支配的で、しばらくたなざらしにされました。しかし、立教大学は、やはりミッションスクールなのでした。ミッション性を正面に掲げた提案を無碍に否定するわけにはいかないのです。社会デザイン研究科は、丸山委員会の答申時においても、すでに研究教育の場であるばかりでなく、社会的なメッセージを掲げる運動体としての立場を明確にしていました。社会的なメッセージを出すことを謳う大学院なんていうのは、他の大学ではつくりにくい。ところが立教大学ではつくれる。立教大学がミッションの学校だからです。これは非常に重要な点です。しかも、この新大学院は、当時の立教大学にまったく欠けていた大型ビジネススクール創設の提案でもあり、なおかつ非営利を専門とするビジネススクール（これこそミッションです）を目指していたわけですから、結局、大学として後押しせざるを得なかった。これが私の振り返りです。

「社会デザイン(学)とは何か」という問いかけを超える

次に、最初に触れた「社会デザイン(学)」とは何か、という問いかけに戻ってのお話です。「○○学とは何か」という問いかけは、歴史的にみると、じつは新しい学問的思考の試みに対する「いじめ」なんです。例えば、「心理学とは何か？」などと問われること、今日ではほとんどない。あるいは、「社会学とは何か？」などと問われることもいまやありません。生理学とか医学も、ずっと昔から自明のものとなされ、それがどんな学問であるかなどと改めて問われることはないでしょう。ところが、100年前、社会学がまだ若かったころは、社会学者自身が自らのアイデンティティについて疑心暗鬼、自信をもっていませんでした。このように、「とは何か」と問われるのは、常に、新しく学問の世界に参入しようとする研究テーマや研究者の側だ

け。入学前の、「いじめ」なのです。これが、いまなお社会デザイン(学)のおかれた客観状況であり、だからこそ、「社会デザインの理念や方法論について書かれた理論書がありますか？」などといった愚問を平気で口にする輩が絶えないわけです。

そもそも学問論の地平から見れば、「とは何か」という定義づけから始まる問いほど不毛な問いはありません。昔、フランツ・ファノンの『アフリカ革命に向けての』の改訳作業の際に、みず書房の応接室でカール・シュミットの『政治的ロマン主義』という著作に遭遇し感動した日のことを思い出します。シュミットは、「政治的ロマン主義とは何か？」などという問いを立てても意味のある答えは出てこないこと、しかし、「○○は政治的ロマン主義だ」という陳述は可能だ、と言っていました。翻って見れば、「社会デザインとは何か？」という問いについても同様のことが言えます。問いへの答えが難しいのではなく、問いそのものが不毛なのです。いっぽうで、逆方向からの問い、すなわち「○○は社会デザインである」、あるいは「○○は社会デザイン学の実践である」といった言い方はつねに可能なのです。では、なぜいっぽうが不毛であり、他方は可能なか。以下、考えてみましょう。

具体的な事物や理念を紋切り型の言葉で定義すること、そこにはつねに罣があります。例えば、あるものを「何かは○○である」という言葉で定義してしまうと、私たちは、その定義の規定する枠組に閉じ込められてしまい、定義の対象とされたものが内包する具体的な内実が目が届かなくなってしまう、そういう危険にさらされています。ちょっと抽象的な言い方をしますと、具体的な事物に名前をつけ分類することによって、私たちは概念（名前・普通名詞・言葉）の世界に閉じ込められ、具体の世界から遠ざかってしまうわけです。ところが「○○は社会デザインである」というような形で、述語の部分に、社会デザイン(学)とか、ロマン主義とかを置いてみることによって、私たちは、そうした言葉の指し示す内容物をいくらでも膨らませていくことが可能になるのです。

思えば、定義づけの罣に陥ったのが、社会学の創始者のひとりエミール・デュルケムでした。彼は「社会的事象social facts」というものを定義して、その定義の中に入ってくるものだけを社会学で扱う対象としました。ですから内心では社会学と隣接すると感じていた生理学や心理学で扱うものは、社会学で扱うわけにはいかないと決めてしまいました。これは大変な誤りだったと私は考えます。例えば、私の研究分野の一つである食に関して言えば、デュルケムの社会学では、食という事象の中でも、社会からもっとも強く規定される部分、外部からもっとも強く強制される部分、要するにもっとも“社会学化”しやすい分野だけに絞ってしまった。その結果、



味覚や栄養、料理技術といった他分野にもまたがる膨大な知識群が排除されてしまった。これは、社会学にとってたいへんな損失でした。

ところが、デュルケムの次の世代にマルセル・モースという文化人類学者が登場します。モースはじつはデュルケムの甥でしたが、彼の考え方は違っていました。モースは、科学の進歩は、各学問領域の境界が踵を接する空間をどう占拠するかによって決まると考えました。言い換えれば、境界領域にこそ面白い研究対象が埋まっていると考えていたのです。モースいわく「科学が進歩するとき、それは常に具体性に向けての進歩であり、必ず未知なるものに向かった進歩である」。未知なる領域と具体性への注目、これこそが私たちの社会デザイン(学)の根本を成すところのもの、そうって間違いありません。

「社会デザイン(学)」という新しい未知な学問分野をつくろうとしているわけですから、それが傍から見て未完成(不完全ともいわれました)であるのは当たり前。それが完成されたものであったのなら、新しくつくる必要などないわけです。新しくつくるものが持っている非常に魅力的なところと、新しさが内包する決定的な攻撃されやすさ、これをヴァルネラビリティといいますけれども、それらは表裏一体のもので、このことを私たち自身がちゃんと自覚しておかないと、外からの攻撃に対して反論できないのです。

繰り返しますが、社会デザイン(学)は新しい学問的挑戦です。ですから、教員であろうと院生であろうと、それぞれの関係者が、自分たちの研究の実践を通して中身を埋めていくということが不可欠です。そうした日常的営為によってのみ社会デザイン(学)なるものは実体化されるのだと考えてきました。

境界領域だからこそ 社会デザイン(学)はおもしろい

21世紀社会デザイン研究科——来年からは社会デザイン研究科ですけれども——に入ってくる院生みなさんは、どういうことをやりたいのか、自分自身でよく分かっていると思います。院生みなさんは、既存の分野でやれないことだから、この研究科に来るわけじゃないですか。既存の研究科でできることだったら、そちらに行けば済む。領域と領域の間に、分野と分野の間にあって、自分のやりたいことのできる場所がなかなか見つからない、そういう思いを抱えていた人たちが、21世紀社会デザイン研究科にやって来たんだと思います。

そういった人たちの心意気っていいですか、パッションを共有しているかぎり、社会デザイン(学)は学問的に未熟だ、などと言われる筋合いは全くありません。自信を持っていい。だって、境界領域について学問的な定義なんてできるわけじゃないじゃないですか。境界領域は境界領域でしかない。でも、いっぽうで、私たちは、境界領域でしかない、などという言い方もしない。そこに社会デザイン(学)という新しい学問の重要な領域があるんだ、と自信をもって言い返すことが大切なのです。院生たちが求めているものは、これまでやれなかったこと、未知なるものの探究です。私たちは、そうした院生たちの意気込みに、正面から応えていく必要があります。

そこで、教員・スタッフの皆さんに、私がいつも言ってきたことがあります。先生がたのご専門は、私もよく分かってます、と。でも、その専門の外延を、5ミリでも1センチでもいいから広げることを考えてほしい。そうしないと、多様な学生たちの関心に対応できない。「自分の専門はこれだから」といって、自分の専門から外れてしまったテーマや学生について、君の指導はできないなどといってしまったら、学生たちは路頭に迷ってしまう。これは非常に重要なところなんです。

自分自身についていえば、2002年に21世紀社会デザイン研究科をつくって、そこで10年近く研究・教育活動を行う中で、自分のやろうとしたことの外延がものすごく広がりました。多分、私以上に勉強したのは、笠原(清志)先生だったと思います。ムハマド・ユヌスさん(ノーベル平和賞受賞者)のマイクロクレジット活動など、彼の専門領域はすごく広がった。広げることは可能だし、広げなきゃいけないわけです。自分の元々の専門領域だけでやっていたら、学生の指導はできないし、学生は来ない。学生のテーマに対して「どちらかといえば他に〇〇先生が私よりも向いてますよ」という理由で副指導にとどまるという対応はありかもしれない。けれども、そういう同僚がいないのであれば、自分がやります、といって指導を引き受けてもらいたい、というふうに、当時はよく言っていました。

それは、学問論というか、研究指導論として望ましいあり方だったと思います。ご存じのように、院生みなさんのすることは研究です。学部だったら、重要なのは知識を教わることです。しかし、大学院は、前期課程であろうと研究です。研究するということは、未知なることを探究するから研究になるわけじゃないですか。単に教わるだけだったら、知識の伝授でしかない。伝授の先に行くためには、どうするか。例えば修士論文の中で5ページでもオリジナルのことが言われていたら、それは素晴らしいことです。その点をエン



カレッジしてあげなければいけない。

ところで、さきほどモースの話の中で、学問の進歩は必ず具体性に向けての進歩であり、未知なるものに向かっての進歩だ、ということを行いました。ところが、ご存じのように、社会デザイン研究科は社会人学生を中心とした大学院であるあるところに、特色があります。では、社会人大学院生の特色とは、何でしょうか。多くの場合、彼ら彼女らは、すでに具体的な問題関心とテーマ、そしてしばしば研究の素材となるべき具体的な知識や経験をもって入学してきます。いっぽう、彼ら彼女らに決定的に不足しているものがあります。それは、方法論です。知識や経験を論文にまとめ上げていくためには、いったんはそれらを解体し、問題を整理し、仮説を組み立て、論証の順番を確認し、結論に導いていくという一連のプロセスに関するノウハウを学ばなければなりません。そこに指導する教員の役割があります。知識や経験、すなわち論文の素材においては、教員よりも院生のほうが優っていても何の不思議もありません。教員は全てについて知っている必要などなく、あくまでも主体は学生のほうだと思えます。方法論の部分では、私たちのほうが長らく研究をやってきた分だけよく知ってる。だから、学生が細かいところで行き詰まったら、「大きくパースペクティブを広げてもう1回、考えてみよう」というような、アドバイスをすることが可能なのです。

「わかりやすすくない」という強さ

最後に、研究科名と専攻名の選択には研究科と専攻の運営に関する大事な戦略が隠されていたことをお伝えしておきたいと思います。一言で言えば、ある種のブランド戦略です。異化効果による差異化戦略だと考えてもらってもいいです。

研究科名と専攻名を考えるとときに(文部科学省への設置申請の書類を準備していたころですが)、学内ではさまざまな異論がありました。そのころ、縁あって、(株)資生堂名誉会長の福原義春さん(1931-2023年)に会って話を聞いてもらいました。福原さんは、研究科の理念も形式もすぐに理解され、こう加えたのです。「学内で異論があるものは、絶対、素晴らしいはず。だから、やりなさい」と(笑)。あの人は本当に素晴らしい人で、私にとってかけがえのないメンターとなりました。彼自身が企画部長だった時期にやりたかった商品企画が社内で徹底的に反対された。それが少なくとも2回はあったと思います。MG5(1963年)とサンオイル(1965年)が、それでした。しかし、いずれの商品も爆発的なヒットをとばしたのです。だから、信念があるなら、反対されても徹底的に主張すべきだ、それが福原さんの考えのようでした。学内で「あんなどこといっしょにやりたくない」、などと徹底的に反対されているときに、福原さんのような学外の人に励まされたら、勇気百倍です。「学内で分かってもえなくても、学外で分かってもえらえるということでは、つまり大学院を受験しようとする人々にも分かってもえらえるということではないか」という確信に近いものを得ることができました。ちなみに、ほぼ孤立無援で始めた文学研究科比較文明学専攻立ち上げ(1998年)のときにも同じような感覚「学外の人は分かってくれる」を味わいました。20名の募集に対して110名もの応募があったのです。

私はブランド論の研究者でもあります。ブランド論というと、ブランド商品の中心核はその差別化(差異化)機能にあります。ですから、耳目に膾炙して「普通商品」化してしまった商品は、その価値も魅力も普通化してしまい(つまり他の商品群に埋没してしまい)、注目されなくなってしまう。大学院や専攻の名称についても例外で

はありません。埋没しないための戦略をどう考えるか。それがまず重要です。

研究科の設置申請書類を完成させる中で、お仕着せの受験マーケット調査を余儀なくされましたが、担当したコンサル会社が提案してきた研究科名が「総合政策研究科」。しかも「〇〇大学ではこれを使っているの、どうか」というもの。無知に対して、怒りに体が震えました。こんな研究科名では、立教大学に学生は来てくれない。ミッション性も何もあったものではありません。科目群の1つに社会組織理論を設けてあることの意味を考えてほしいと思いました。組織理論を教える研究科としては、ちゃんと自信を持って提案できるような組織の形態と名称にすべきだということです。

開設当時の、信号としての「社会デザイン」。しかも「21世紀」などという屋上屋的な冠言葉。おまけに、長ったらしい、比較組織ネットワーク学などという専攻名をつけたのはなぜなのか、ということ。つまり、簡単に説明できない用語や事柄をあえて選択したことの意味は、どこにあったのかということですね。

さきほどちょっと触れましたが、大学院設置の準備段階で開かれた政策会議の場で、複数の委員から、21世紀社会デザイン研究科のような「こんなへんてこな名前の、訳の分からないところはいっしょにやりたくない」と言われました。要するに、手に負えない、ということですが、じつは、これは天祐でした。なぜなら、見方を換えれば「手に負えない」ということは、すなわち、他の研究科への同化とか学部への吸収とかのリスクを最小化できるということ。こちらとしては、「いっしょにやれない」というのであれば、「ひとりで勝手にやりましょう…」ということになります。21世紀社会デザイン研究科が「独立研究科」であることの意義もそこにあります。

研究科名にせよ専攻名にせよ説明するのが大変だというのは、じつは重要な事柄なのです。「説明するのが大変だ」ということは、「説明する努力をなさい」という意味。他人に説明するためには、自分で考え自分の言葉で説明しなきゃ説明できない。すごく大変だけれど、すごく大事な思考訓練の営みだと思います。

要するに、思考のプロセスが重要だということなのです。大学院に入ってくるんだったら、自分がやろうとしていることが何かということとをじっくり考えるためにも、まずは研究科の名称や専攻の名称がどういう経緯でできてきたものか、そして、なぜ、こんな七面倒くさい名称になっていたのかを、ときどき考えてほしいと思うわけです。知らない、分からないことを聞くのが恥ずかしいと思う人は、大学院に来る資格がないですね。そのように思います。

長 北山先生、貴重なお話ありがとうございました。本当に心から御礼申し上げたいと思います。





おう よう てい
王 昱婷 さん

中国からの留学生。研究テーマは新型コロナウイルスをめぐる疑似科学の拡散について。主にSNSで疑似科学内容が広く拡散される原因を究明する。博士課程前期2年。宮本ゼミ所属。

寛容な人間に成長したい

異文化を理解し、より寛容な人間として成長したいというモチベーションを抱き、日本に来ました。これまでの授業を通じて、グループディスカッションの形で社会問題を発見し、解決策も一緒に考える姿勢は、私にとって非常に有意義だと思います。なぜなら、これによって以前のように受け身の立場から抜け出し、自発的に課題を見つけ、探求する姿勢に変わったからです。そして、現代社会の様々な形のコミュニティや関わり的重要性について深く考えさせられました。

また、立教大学で行われたある学部試験監督のアルバイトを務める中で、先生が私たちの任務はカンニングをする学生を見つけるのではなく、カンニングをしにくい環境作りが大切だという指摘を受け、異なる立場から課題を再評価することを学びました。このような考え方は、私の将来の人生においても絶対に役立つと思います。

21世紀社会デザイン研究科で学んで身につけたのは、一人ひとりによって異なるかもしれませんが、それこそ社会デザイン研究科の魅力だと思います。私にとっては、寛容な思考を育むことにつながっています。

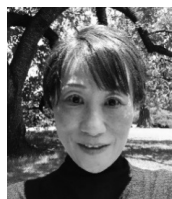


かつ また まさる
勝俣 優 さん

箱根町役場定年退職後、再任用により地元仙石原地域の出張所に勤務。地域コミュニティ再生に向け奮闘中。実家は創業1961年（昭和36年）のラーメン店（現在、妻が切り盛り）。博士課程前期2年。亀井ゼミ所属。

次なるステージへの導き

今日、日本においては、人口減少や高齢化、さらには、地域所属意識の低下等に起因し、地域コミュニティは衰退傾向にある。このことは、私が生まれ育った、勤務地でもある箱根町仙石原地域においても例外ではない。このようなことから、私は、当該地域におけるコミュニティの再生を図るため、その方策として、地域運営組織の導入について調査・研究を進めている。調査・研究に係る修論の執筆は、私にとっては思いのほかハードルは高いが、亀井先生を始めとする諸先生方のご指導（伴走）や学友の励ましもあり、悪戦苦闘しながらも着地点を見据え取組んでいる。学生生活においては、多種多様なキャリアを持つ皆さんと、年齢や国籍等を越え交流でき、40年振りに学生としての感覚を満喫している。1年時の春休み（3月）には、同級生有志により「箱根ツアー」を実施していただき、多くの皆さんに箱根に來訪いただいた。大型バスをチャーターし、観光施設や名所旧跡を巡った他、実家の小店（ラーメン店）にまで足を運んでいただいた。当日、ほっこりとしたハブニングも起こったが、皆さんにとって忘れ得ぬ良き思い出になったものと感じている。本科でのこのような学びや経験は、私のライフコースの振返りと、次なるステージへ向けての最良の導きであることに疑う余地はない。



つな しま
綱島 まゆみ さん

障がい児の療育や子ども家庭支援の領域に、保育士、講師として携わる。現在は発達に気になる子どもとその親を対象としたコーチング業。自分が知る世界の狭さを感じ21世紀社会デザイン研究科へ入学。博士前期課程2年。滝口ゼミ所属。

多様な学びを通して

『学際的な学び』に惹かれ、「視野を広げたい」との思いから21世紀社会デザイン研究科の門を叩きました。私の研究は、エシカル消費をどう広げて行けるか、消費者の動機に焦点を当てたものです。これまでの経歴とは異なる分野への挑戦となりましたが、多種多様な授業から、生活者の動向が現代の社会課題と深く関わっていることを知り、消費に対する意識がガラリと変わりました。入学当初は「幅広い知識が得られれば良いな」ぐらいな気持ちだったのですが、実際に学び始めると、「多角的な物の見方や捉え方の大切さ」が見えてきて、今は固い頭を柔軟にすべく奮闘の日々です。一人で行き詰った時は、学生同士の話がヒントになることも多く、院生に経験豊富な社会人が多いことにも助けられています。私のモットーは「Think Globally, Act Locally（地球規模で考え、足元から行動せよ）」です。まずはやってみよう！を大切にしています。これからも視座を高めながら、身近な課題や人との有機的なつながりに関わっていききたいと思っています。



たか くわ りょう
高桑 涼 さん

生体医工学を学ぶ大学を卒業後、地元である長野県の郷土料理の一つである昆虫食が食糧難の課題解決に繋がる可能性があるということに興味を持ち、大学院に進学。修士課程前期2年。長ゼミ所属。

様々な方々からの学び

私は大学時代に地元である長野県の郷土料理である昆虫食が食糧危機の課題解決に繋がるというニュースの記事を読んだことをきっかけに昆虫食についての研究がしてみたいと思い、そのまま大学院に進学し勉強することを決めました。そして、現在は食糧危機に対して昆虫食の普及は本当に有効なのかを明らかにするための研究に取り組んでいます。

また、21世紀社会デザイン研究科では、様々な年代、国籍、職種の方々が在籍していてそれぞれの方々が社会をより良いものにしたいという思いから研究をしています。そういった方々と一緒に授業を受けたり、お話ができるという機会があるということは、社会人生活を経験する前の私にとってはとても貴重な経験であり、日々様々な刺激を受けながら勉強させていただいています。

残り半年間の大学院生活となりますが、この期間でできるだけ多くの方々から、多くのことを学び吸収して、立派な社会人を目指して生活していきたいと思っています。



大学院は想像してなかった人生の転機となる



2022年卒
しのきりさ
篠木 理沙さん

大学を卒業後、東京の私立高校で10年間事務職員として勤務。同時に地域コミュニティをつくる社団法人に加入し、活動する中で、学校が地域の拠点となるコミュニティづくりを学ぶため、研究科に入学。2022年3月修了。

私の研究テーマのきっかけは、主指導の中村陽一教授に紹介していただいた本でした。それは、島根県の離島である海士町が、人口減少による地域存続の危機に直面した際、高校の魅力化によって乗り越えた過程を描いた本です。本に感動し、すぐに海士町を訪れました。そして、高校魅力化プロジェクトを研究の題材に決め、卒業生は地域へ還流するのかというテーマで研究を始め、考察の一つとして、還流には地域の魅力化が必要だとしました。

海士町はこれまでも、地域活性化のため地域全体で対話の場を持ち、挑戦を重ねてきました。役場では令和3年から、役場だけでなく地域の事業所でも働ける「半官半X」制度をつくりました。

私は研究の中でその制度を知り、大学院の修了とともに転職し、海士町へ移住しました。私の現在の仕事は、教育委員会で官の業務を担当しながら、地域の事業所でも勤務をしています。現場で働くことで地域の視点を持ち、地域の人々との繋がりを広げる中で、高校の卒業生だけでなくインターン生やIターン者の定着と還流にも関心を持ち、より魅力的な地域にするため何ができるかを考え、取り組んでいます。先日、町長はじめ管理職に1年間の報告会を行った際、みんなで地域のためになる制度に改善していかうという話があり、この協働して挑戦を重ねる海士町で充実した日々を過ごしています。修論は一度書き上げましたが、修了後も引き続き実践と研究が続いている感覚があります。

また、生活においては、地区の4年に1度の大祭に向けて、私は神楽の横笛を担当し、週に2回、地区公民館に集まって練習しています。地域の人々との繋がりが少しずつ増え、支えてもらいながら楽しく過ごしています。

温かくご指導をいただいた先生方と素敵な同期のみなさんのおかげで、修論を書き上げることができ、入学時には想像もしていなかったキャリアを選択することになり、感謝しかありません。大学院は人生の転機となる時間が過ごせると私は思います。

芸術を通して社会との接点を創出していく



2020年卒
あり いずみ し おり
有泉 汐織さん

2020年3月卒業。立教大学現代心理学部映像身体学科卒業。サントリーパブリシティサービス株式会社勤務。

社会と芸術の関係

学部生時代は立教大学現代心理学部映像身体学科でダンスの振付理論を学びました。学部在学中も学外の舞台に出演したり、自身の作品を発表したりしていましたが、学部卒業後もダンスの活動を継続するなかで、公的資金を財源に作品が制作・上演されたり、多文化理解や共生といった社会課題との関連で作品を制作することが求められるなど、「社会の中で踊ること」を強く意識させられました。芸術は、社会からどのような期待を寄せられているのか。私はどのようにダンスを社会に提示していくべきなのか。まず、社会と芸術の関係を知らなければならない、そんな強い危機感を持って、若林朋子特任教授の研究室のドアを叩きました。

研究科では、若林先生のもとで文化政策や芸術文化支援について基礎から学ぶだけでなく、これまで私が考えを巡らす機会もなかったような領域（安全保障、貧困、まちづくり、地域研究（ア

フリカ）など）で、様々なバックグラウンドと問題意識を持って研究にあたる仲間に出会いました。これらの出会いは、私の中にある「社会」という概念を多様で幅広いものにしてくれました。

研究科での日々を経て見えてきたもの

研究科での授業や論文執筆を通して、私の関心は芸術活動の持続性へと向かいました。研究科在学中は論文執筆だけでなく、持続可能な芸術活動の実践として、支援に依存しないミニマムな手作り公演を企画・実施し、研究と実践（現場）を往還する日々を過ごしました。そして、芸術と社会が多くの接点を持つことで、文化芸術が身近にある社会を創出することができ、ひいては持続可能な芸術活動の実現につながるのではないかと考えるようになりました。

昨年、ダンサーとして出演させていただいた田中大志監督の短編映画『そのこえ』が公開されました。この映画は場面緘黙症という症状をテーマとして取り扱っており、3月8日に研究科で『そのこえ』一場面緘黙（かんもく）症を知り、内なる「こえ」を考え—を開催していただきました。上映会には学生の方のみならず、当事者の方、支援団体の方など多くの方にご参加いただき、作品を通して、これまで繋がりのなかった方々と接点を持つことができた機会となりました。これからも、活動や仕事を通して、芸術と社会の接点を創出することを積み重ね、持続可能な芸術活動が実現する社会づくりに貢献していけたらと思います。

2023年2月28日(火)

14:00 ~ 17:00(対面・オンライン同時開催)

会場 立教大学池袋キャンパス8号館8101教室

主催 立教大学21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所

国際シンポジウム「ジェノサイド後の分断社会における和解と共生の可能性と不可能性—スレブレニツァを事例に、『犠牲者意識ナショナリズム』の視点から」

長が研究代表を務める科研費(C)「ジェノサイド後の分断社会における和解と共生の可能性—スレブレニツァを事例に」(20K12332)の総括として、『犠牲者意識ナショナリズム』(東洋経済新報社)の著者林志弦^{イム・ジヒョン}韓国・西江大学教授をお招きし、ポスト・ユーゴ地域を専門とするロンドン大学のドラゴヴィチ=ソーソ教授、橋本敬市JICA国際協力専門員、クロス京子京都産業大学教授とともに、ジェノサイド後の分断社会の和解や共生、記憶の政治について多角的に検討した。対面・オンラインあわせ国内外の200名が参加した。(長 有紀枝)



01

2023年3月8日(水)

19:00 ~ 21:00(対面開催)

会場 立教大学池袋キャンパス11号館 AB01教室

主催 立教大学21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所

映画『そのこえ』公開上映会&トーク 「場面緘黙(かんもく)症を知り、内なる“こえ”を考える」

映画『そのこえ』は、場面緘黙症(※)の主人公が、就労継続支援事業所でダンサーと出会い、踊りによって自分の「声」を発見していく物語。2023年3月8日(水)に開催した上映会&トークでは、田中大志監督と、ダンサー役で出演した研究科修了生の有泉汐織さんを迎え、大熊先生の知見をいただきながら、誰もが心に抱えているであろう内なる「こえ」に耳と心をすます対話について考えました。当日は、当事者や本学在学生、研究科修了生など百数十名の方がご参加くださいました。(若林 朋子)

(※) 家族などには話ができて、学校や会社など特定の状況下で発話できない疾患。多くは幼少期に発症するが、正しく理解されず見過ごされたり、成人後も症状が続き生きづらさを抱えたりすることもある



02

2023年6月20日(火)

18:30 ~ 20:00(対面・オンライン同時開催)

会場 立教大学池袋キャンパス 11号館 AB01教室

主催 立教大学21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所

共催 立教大学文学部

公開講演会「世界難民の日」に考える ～世界の現状と私達にできること

6月20日の「世界難民の日」を記念した本学教員と学生によるシンポジウム。長が「世界と日本の難民の状況」を、文学部の渡名喜庸哲教授が「難民だった哲学者」としてハンナ・アーレントを紹介後、元難民で、ブルンジ出身のMSDA留学生シナイ・バカニボナさん、ウクライナ出身で、文学研究科所属特別外国人留学生ボリーナ・ザボロトナさん、ポーランドでウクライナ避難民支援に携わった文学部キリスト教学科4年の水流実咲さんがそれぞれの体験を語り、参加者とともに私達にできることを考えた。(長 有紀枝)



03

2023年7月6日(木)

18:30 ~ 20:00(対面・オンライン同時開催)

会場 立教大学池袋キャンパス 11号館 AB01教室

主催 立教大学21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所

世界のトイレ問題とサーキュラーエコノミーを考える

7月6日(木)に「世界のトイレ問題とサーキュラーエコノミーを考える」をテーマとして、岡山朋子氏(大正大学地域創生学部地域創生学科教授)と加藤篤氏(特定非営利活動法人日本トイレ研究所代表理事)から現代社会におけるトイレ問題についてご講演をいただきました。また、齊藤学志氏(立教大学社会デザイン研究所研究員)からサーキュラーエコノミーの実現に資するミネラルイオン技術を用いたオフグリッドトイレの研究開発の最新動向についてご報告いただきました。その後、長坂が進行役を務め、上記3名にご登壇いただき、災害時の仮設トイレの衛生問題、公衆トイレの官民による責任分担、タブー化されデータによる可視化が困難な食と排泄の関係、トイレを巡る障がい者への合理的配慮、ジェンダー問題、安全な水とトイレを巡る世界的な課題等について討論しました。健康から命、人権、環境などの様々な視点から、トイレの社会デザインの必要性が確認できました。(長坂 俊成)



04

Graduation Ceremony of the MSDA Course

Congratulations to the Inaugural Class of the MSDA Course! The commencement ceremony for the inaugural class of the Master of Social Development and Administration (MSDA) course was held at the Magnolia Hall of the Chapel House on September 19, 2023.

The ceremony was preceded by a pipe organ performance by a student of the Organist Guild, then the Dean of the MSDA course, Professor Osa, Professor Kuramoto, Associate Professor Nakano, the MSDA staff, the graduating class of 2023, and graduating students' families and friends attended the ceremony. We were surprised to have the Ambassador of the Independent State of Samoa as our guest.

The MSDA course was launched in September 2021, and seven students from Burundi, Gambia, Mozambique, Namibia, Samoa, and China came to Rikkyo University to start their graduate work. Due to the COVID-19 pandemic, no one could attend classes on campus at the beginning. Finally, in May 2022, all students could study together in a classroom. During the tough time, the class of 2023 built a strong relationship, and will hopefully cherish the global friendship after completing their studies.

We extend our best wishes for their continued success in the future! (The MSDA staff)



研究科のイベント案内

進学相談会は7月、11月の2回。その他公開講演会を年に数回実施しています。
詳細は研究科公式サイトでお知らせします。

入学試験概略〈2024年度(2024年4月入学者対象)〉

博士課程前期課程

- 入学定員 50名
 - 入学試験実施時期 秋季と春季の2回
 - 対象 出願資格を有する者、もしくは本大学院において、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者。
(注) 後者の出願資格を得るためには、出願に先立ち、出願資格審査を受ける必要があります。
 - 選考方法 書類審査、筆記試験、口頭試問の成績を総合的に評価して行います。
- ※入試日程や試験区分は公開される入試要項をご覧ください。入試要項は6月上旬頃(秋季実施分)と11月上旬頃(春季実施分)に公開されます。

博士課程後期課程

- 入学定員 5名
 - 入学試験実施時期 春季のみ
 - その他 出願資格は前期課程と異なりますので、入試要項に掲載される内容をよくお読みください。
- ※入試要項は11月上旬頃に公開されます。

前期課程・後期課程とも、詳細は研究科公式サイトでご確認ください。

研究科・入試に関するお問い合わせ

立教大学独立研究科事務局 cde-ad@rikkyo.ac.jp

発行/
立教大学大学院
21世紀社会デザイン研究科
編集長/長 有紀枝
編集担当/品治 佑吉
発行日/2023年12月2日
〒171-8501
東京都豊島区西池袋3-34-1

More Information

21世紀社会デザイン研究科では、講演会やイベントの情報を研究科公式サイトでお知らせしています。

21世紀社会デザイン研究科
公式サイト
<https://sds.rikkyo.ac.jp/>



21世紀社会デザイン研究科
Facebook
<https://www.facebook.com/21csd/>

